

異孝之著『パラノイドの帝国』 アメリカ文学精神史講義 (大修館書店) 刊行記念

異端の時代のパラノイド・スタイル

異孝之×森本あんり トーク&サイン会レポート

11月21日、東京・神保町の東京堂ホールにて異孝之の『パラノイドの帝国』アメリカ文学精神史講義 (大修館書店) 刊行記念イベントが行われた。「異端の時代のパラノイド・スタイル」ホフスタッターを超えて」と題し、本書著者で慶應義塾大学教授の異孝之氏と国際基督教大学学務副学長、同教授の森本あんり氏によるトーク&サイン会で、アメリカ社会の構造を知り尽くした2人が文学、政治、宗教などの観点から現在のアメリカについて語った。

異孝之の最新刊『パラノイドの帝国』はアメリカ精神史のキーワードで「反知性主義」と並び論じられる「パラノイド (陰謀論)」について異孝之のこれまでの論考を集積して解き明かす内容である。赤狩りや反テロ戦争に典型的に象徴される「パラノイド」という病的傾向こそがアメリカ文学の豊穡をもたらした要因であるんだ「熱病」の正体

(新潮社) も刊行して、965年にリチャード・ホフスタッターが著書『アメリカ政治におけるパラノイド・スタイル』の中で定義している。「パラノイア」が指す被害妄想は、自分が絶えず人から責められ、非難されていると思ひこむ個人レベルの精神状態のことです。私の好きなフィリップ・K・ディックはこの「パラノイア」的作家だと評している。対して「パラノイア」あるいは「パラノイド・スタイル」とはなにぞや。それは国家レベルの被害妄想。国家が何らかの陰謀によって陥れられようとしている、それを心配するメソッド・スタイル」などです。この被害妄想が先鋭化するに極右に走り、そして解脫する。続けてホフスタッターと「スタイル」と

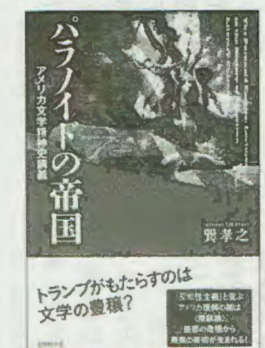
森本氏も8月に『異端の時代』(岩波新書)を刊行して「(右波新書)を刊行したばかり。なぜトランプは世界を席巻し続けるのか。世界に蔓延するポピュリズムは果たして民主主義の異端なのか正統なのかを、異端発生のメカニズムを解明することに、キリスト教史の展開から丸山眞男らの議論を精緻に辿ることによって「正統と異端」の力学を浮き彫りにし、現代人のかくれた宗教性とその陥穽を示す内容である。

「パラノイア」という単語が使われるが、「パラノイド」とはどう違うのか。2つの単語が持つ違いについて異孝之は「両者の違いは1ド・スタイル」とはなにぞや。それは国家レベルの被害妄想。国家が何らかの陰謀によって陥れられようとしている、それを心配するメソッド・スタイル」などです。この被害妄想が先鋭化するに極右に走り、そして解脫する。続けてホフスタッターと「スタイル」と

「トランプが文学界に与える影響」
 続けて森本氏は「異さんは以前、トランプというあまりにも虚構を作り上げるのが上手な人物が出現したために文学者がお株を奪われてしまった、とおっしゃっていました。これは面白い指摘だと思います」と述べ、異孝之氏が応答する。「今年」になったSPFとファンタジーの女王、アーシユラ・K・ルグウィンをはじめハイラインやアシモフらこそがトランプの言うオルタナティブ・ファクトを書いてきたという批判が出たんですね。それを読んだルグウィンは烈火のごとく怒り、自分の作品はオルタナティブ・ヒストリーであって、トランプのオルタナティブ・ファクトはただの嘘である。自分分は真実を書いているのだ



異孝之氏 (左) と森本あんり氏



トランプがもたらすのは文学の豊穡?
 四六判・258頁・2200円
 大修館書店
 978-4-469-24620-9
 TEL. 03-3868-2651

と反論しました。ただ、作家自身が弁明しなくてはならないささか困った事態になっているのです」と述べ、さらに「ニューヨーク・タイムズの辛口批評家であるミチコ・カクタニがトランプはポストモダン思想を濫用している」と論じた『The Death of Trump』を今年出したのですが、批判の矛先がデリタやド・マンにも向けられてしまっているのですね。ここ20〜30年の文学理論を支えてきたポストモダンリズムもトランプによって窮地に追い込まれている現状なのです」とトランプが文学界に与え続けている現状について語った。

アメリカ文学を代表する作家たちが該当します。反権威的な反骨精神がアメリカ文学にとって重要な要素だといえます。つまりこの帯文には最悪の時代にこそ文学の傑作が出てくるのではないかと、という予期が込められているのです」と語った。反知性主義という論点に対して森本氏は「それにエマソンやソローという作家は今となってはほとんどが反知性主義ないしはヒッピー文化を象徴する1つのアイコンだといえますね」と述べた。

『パラノイドの帝国』から読み取れる論点について森本氏はさらに言及する。「文学作品が現実を写しとっているといわれることがままありますが、その解釈は誤っていると思います。現実を写しとっているのではなく、先に形や「象」があってそれがやがて現実になっていくのではないだろうか。実は現実と創作の関係の起承転結がひっくり返っている。たまたま前に言ったことが当たりました」というものではない。物事が本来動くべき方向を現象するのが文学なのだろう、ということが見えてくる、

トランプは文学にとって仇なす存在なのか。しかし『パラノイドの帝国』の帯には「トランプがもたらすのは文学の豊穡?」と記されている。この言葉の真意について巽氏は「トランプのような反知性主義的なもの、パラノイド的なものを無視したらアメリカ文学史の主要な部分が消失してしまいます。なぜなら反知性主義とは反権威主義、大学に象徴されるような権威に対して批判的な立場をとり、例えばメルヴィルやマーク・トウェイン、フーナー、ヴォネガットら

そんな怖さを感じました」と語った。この指摘に対して、トランプという存在は

アメリカ人の無意識が望んだひとつの記号であると巽氏は応答した。

■アメリカ人の思考のタイプ

アメリカのパラノイド・スタイルを示す1つの型として「インペーターもの」のテレビドラマを好む傾向があることに言及される。なぜ宇宙人を扱った作品が増えたのか、森本氏が解説する。「1957年のスパート・ショック以来、アメリカ人のなかにUFOを見たという人が急増するんですよね。空を見て変なものがあればUFOだろう、と。そしてどんどん話が膨らんでいって宇宙人に攫われた人や交信する人が出てくる。しまいには宇宙人との子どもを産んだという人まで現れてたちまち宗教化していきました。人間の想像力の広がりを作る世界のリアリティを感じたものです。日本ではインペーターもののテレビドラマはどっくに見かけなくなりまして、アメリカでは今でも何かしらやっていて、平気で楽しんでる。これもアメリカ人の思考のタイプだといえるのではないでしょうか」と述べると、巽氏はこのアメリカ人の精神構造をさらに掘り下げる。

「UFO話の元になっているのは17世紀のインディア・キャプティビティ・ナラティブなんです。白人のピューリタンがインディアンに攫われて、カナダと

の国境を越えてカトリックに渡されることを恐れていました。信仰心を変えられない恐怖ですね。これが現代のエイリアンに攫われる恐怖の原型なんです。つまり最初から陰謀妄想ありきのアメリカ人の好きなタイプだと言えます。ただアメリカ人にとって陰謀妄想は大事で、これがないと征服欲も生じない。北米大陸を開拓していく「マニフェスト・デスティニー」と陰謀妄想は裏表の関係だったのではないのでしょうか。これこそアメリカの精神史の面白い部分ですし、アメリカという国は植民地時代からパラノイド・スタイルがあったのではないかと、ということが見えてきます」と解説した。

トークは他にも「異端と正統」の議論、「コン・マ」への言及、映画『グレイテスト・ショーマン』で描かれたP・T・バーナムについてなど多角的な切り口でアメリカ社会の精神構造を読み解きながら締めくくられた。